

離島の休日 奄美・楽園の旅



↑イサ子さんの手がける島料理。天然もずくの寒天寄せや、ハンダマ（金時草）ご飯、地場産伊勢海老の味噌ソース焼きなどがつく写真の料理でひとり8000円。黒糖焼酎は400円～（価格は取材時）、大きなコップになみなみとついでくれるので、申し訳ないようなたまらなくうれしいような不思議な気持ちになる。



↑店主の恵上イサ子さん。元中学校校長のため、島の人々からは「先生」と呼ばれて親しまれている。

なつかしや家
 住 鹿児島県奄美市名瀬柳町11-26
 ☎0997・57・1980
 営 18時30分～22時 休 不定



「不喰手と蘇鐵」 個人蔵 © 2025 Hiroshi Niyma

↑島の観光拠点施設「奄美パーク」の中にある田中一村記念美術館。一村の作品や資料約80点を常設展示（年4回展示替え）。

田中一村記念美術館
 住 鹿児島県奄美市笠利町大字節田1834
 ☎0997・55・2635
 営 9時～18時（7月、8月は～19時／入館は閉館30分前まで） 料 520円（大人）

翌日は朝から中南部にある宇検村で釣りをして過ごし、夕暮れに訪れたのは、島の中央部にある三太郎線という全長12kmの旧国道。山地を抜ける細い2車線道は稀少生物が横断することが多く、夜間は上下線とも30分に1台のみという通行制限が設けられている。制限速度の時速10kmで走行すると、路肩で小灌木の葉を食べているのはアマミノクロウサギ。ヘッドライトの明かりの中を跳ねるのはアマミトゲネズミと、初めて目にする生き物が次から次へと姿を現す。2泊3日の最終日は、田中一村記念美術館へ。生前は評価されず目の目を見ることのなかった孤高の画家。花鳥草木の濃密な生命感に満ちる、私たちが「一村だ」と感じるあの画境は、奄美で過ごした晩年に拓かれたことがわかる。一村の心を動かし、畢生の画境へと導いたものは何だったのか。何度でも島に通い、飲み、人とふれあううちに「結い」という言葉を教わった。人と人が助け支え合うこと。自然との縁を大切にすること。それが、奄美の人が最も大事にする心のありようだという。生物多様性の宝庫にして人の心が温かく通う奄美は、訪れるたびに濃度を増す楽園の島である。



↑総面積712.35km²、東京23区よりも大きな有人島には、稀少な生物が数多く棲息している。



↑「奄美群島国立公園ビジターセンター 奄美自然観察の森」。チチアワタケやヌメリイグチの一種などが見られた。



↑『サライ』編集長の吉尾拓郎。奄美の四季折々の豊かな自然と人情に魅せられ通い詰めている。花粉症持ちのためスギ花粉がないこの島へ、老後の移住すら検討中。

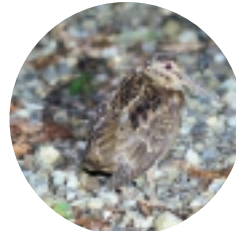


アマミノクロウサギ

←奄美大島と徳之島にのみ棲息する特別天然記念物。原始的なウサギの特徴を有する。一時激減し、絶滅危惧種に指定されたが、マンガースの駆除などにより頭数は回復傾向にあるという。

アマミヤマシギ

→奄美群島と沖縄北部の照葉樹林に棲息する地上性のシギ。沖縄県指定天然記念物。



アマミトゲネズミ



←天然記念物。奄美大島、徳之島、沖縄本島にのみ棲息。夜行性で前後肢を揃えて跳ねる。



↑海の手と魚影の濃さも奄美大島の魅力だ。写真の魚は、サビキ仕掛けを落としたらいつの間にか釣れていたヒメアイゴ。

鹿児島上空から南西へ約30分ほどで、航空機の機内には降下を告げるアナウンスが流れる。雲海をくぐると、洋上に緑の大きな島が見えてくる。亜熱帯のこの島には、昨年から今年にかけて4度目の訪問となる。スカイマークの便を利用したため、到着時はまだ午前中。キノコを観察しようと、空港からほど近い龍郷町の「奄美自然観察の森」に出かけた。本土では冬に激減するキノコも、奄美大島では最盛期。無事に数種を観察できた。龍郷町から名瀬方面に車を走らせると、小さな漁港が目にとまった。透明度の高い海中に巨大なギンガメアジの姿が見えたので、慌てて釣り具を出しルアーを投げるとヒット。しかし竿をのされて手もなくフックアウト。その後も漁港や海岸を見つけてはルアーを投げつつ海沿いを走った。名瀬のホテルに着くともう夕暮れ。急いで島料理の名店「なつかしや家」へ。店主の恵上イサさんは、中学校の校長を退職後に、島の食文化を伝えたい、という思いから店を開いたという。目が覚めるほどおいしいのどこか懐かしい島料理と、イサ子さんの温かい人柄に惹かれて、奄美旅の折には必ず予約をいれてしまう。

スカイマークで奄美へ快適旅



→スカイマークの航空機の機体はB737-800（現時点）。機体が決まっているので、運航の加減で小さな飛行機に振り分けられるなどの心配は無用だ。



↑座席は横幅に余裕のある3列シート。また、前後の座席幅が通常座席より広い（+19〜38cm）「フォワードシート」も用意されている。路線により1000〜2000円を支払うことで利用でき、優先搭乗やお菓子無料サービスなども付帯される。ネットで事前予約可能。通常座席も含め、座席下にコンセントが用意されている機体もあり便利だ。



↓奄美大島へは、鹿児島で乗り継ぐ。羽田の他、名古屋、神戸からも毎日便が出ている。



今回の奄美旅で利用したのは、スカイマークの航空便。東京・羽田から鹿児島で乗り継いで奄美空港へ向かう。機内に入ると、クリーム色のシートが並び明るい印象だ。座席の前後間隔は広く（約79cm）、^{かつお}幅のよい男性（私）でも充分にくつろげる。また、シート自体の手触りがよく、ほどよいクッション性もあり快適だ。機内の無料ドリンクサービスではお茶、コーヒーやリンゴジュース、天然水などが選べる。手荷物に関しては、空港での預けは20kgまで無料。機内持ち込みも10kgまで可能。航空会社によっては、細かく追加料金がかかる場合もあるので、基本サービスの充実度は嬉しい限りだ。同社は公益財団法人日本生産性本部による調査の国内長距離交通

門で、4回顧客満足度1位を達成しているという。

朝に羽田を^た発てば午前中に奄美大島に到着できるため、奄美空港到着から早めの昼食をとり、その日の午後を存分に遊び倒すことができた。また、特筆すべきは航空運賃。通常時でもリーズナブルな運賃で旅行ができる上に、割引サービスを上手に用いるとさらにお得度が増す。

奄美の観光は気候的にも冬がベストシーズンと個人的には考えているが、来島者の減少する冬期は、滞在の快適さと料金の両面でとりわけ狙い目といえよう。

航空便の予約はスカイマークのホームページ上から行なうと便利だ。搭乗者情報を登録しておけば、チケットの購入をはじめ、さらに足元の広い座席の指定や窓側・通路席など自分好みでセレクトでき、予約便の確認なども簡単にできる。スカイマークの便は、羽田の他に、神戸、名古屋（中部）、札幌（新千歳）、福岡ほか、全国計12の空港から発着をしている。安心して快適な旅の心強い選択肢である。

スカイマーク
公式HP



スマホからは
こちらへ！